

パーマー

消化器病学のポイント

〔著〕 Eddy D. Palmer

〔訳〕 丹 羽 寛 文 東京大学第1内科

金 子 栄 蔵 浜松医科大学助教授

川崎医科大学教授

木 原 彊

E. D. Palmer の Practical Points in Gastroenterology の邦訳が丹羽寛文、金子栄蔵氏の手によって出された。この本は原著者と邦訳者の序にかいてあるように、もともと医学生と卒後研修医のためにかけられた消化器病学のテキストである。

E. D. Palmer は1951年に Benign Intramural Tumor of the Stomach (Medicine, Vol. 30. 81-181. 1951) を書いた人だけに、この本の内容は極めて豊富で、これだけの内容を195頁によくまとめあげたと思われる。しかも、世界中どこで読まれても間違いないように細かい配慮があちこちに配られている。例えば、“無鉤条虫の中間宿主はウシ、ラマその他の有蹄動物である”とし、コンゴ地方やレバノンではまだ人口の7～15%にみられる舌虫類感染症まで記載してある。また豊富な内容を簡潔、明瞭、正確に記載している。Zenker 憩室は口腔および下咽頭の項目に記載し、その発生部位は、Lannier-Hackerman の間隙だと正

確である(わが国の教科書には間違いが多い)。また原発性アミロイドーシスの半数に胃にも病変がみられることや皮膚疾患と消化器のところでは稀だが大切な悪性萎縮性丘疹症(Papulose atrophicans maligne)がDégos症候群としてちゃんと記載されている。

このように、内容が広く消化器病学とそれに関連のある部門に亘っているため、訳者は大変苦勞されたと思われるが、大変忠実に明解に訳している。私はこの本を川崎医大でのGastroenterology(小児科、外科を含む)のブロック講義140時間のLeitfadenとしたいと考えていたが、やっと半ば読みかけていた折にこの邦訳書が出版されたので大変たすかった。邦訳書は装幀も本の大きさ、索引も原本と同じにしてあり、小冊子で大変よみよい。図はいくらか小さくなっているが、はっきりしている。邦訳書は学生には消化器病学の知識の整理に役立つと思われ、研修医や消化器専門医にとっては一つ一

つの項目からもっと広く深い知識へのLeitfadenになるに違いない。

この本は原著者も訳者も述べているように、著者独自の見解が述べられている所があり、簡潔にかかれていっただけに注意深く読み理解する必要がある。9頁の“食道には牽引性憩室 traction diverticulum は存在しない”や“腐食性食道炎にステロイドは禁忌である”と断定しているところなど著者自身の見解であろう。しかし、若い人が読むにしろ、消化器専門医が読むにしろ、いつも、何故、どうしてと考え、理解を深めるべきであろう。懐疑のない学問は宗教である。

本書は初版であり、数カ所ほど誤植に気付く。しかし、訳者が謙虚に諸先生の御叱正をまって、今後一層完全なものにしたいと序にかいておられる。広い読者層から、どしどし意見が出て、本書がより完璧な邦訳書となることを希望する。

A 5 頁 246 図 9 1977

¥2,800 160 医学書院刊